

名作映画に登場する  
ステキな宝石たち③

瘋癲老人日記

## 猫目石と女の関係

エッセイスト 岩田 裕子



人間よりえらいと思ってる。  
所有されるのではなく、所有させてあげ  
ると思ってる。

怠けるのが好き。

ときおり気まぐれなまばたきをして、  
人間たちを魅了する。

これって猫のこと？

宝石のこと？

猫と宝石は、どこか似ている。

その昔、ケーリー・グラントが演じた宝  
石泥棒はキャットと名乗っていた。その  
せいで、というわけではないけれど。

『不思議な国のアリス』に登場するチェ  
シャー・キャット。不気味な笑顔が特徴の  
不思議な猫で、笑った形の口だけ残して、  
あとは消えてしまうのが、彼の得意技。

その消えるまえの一瞬の瞳の輝きが、  
猫目石を思わせると、ある詩人にささや  
かれたことがある。

動物の名をもつ宝石、猫目石には、一種、  
野性的な妖しさがただよっている。

眠ったような半透明の蜂蜜色を、瞳孔  
にも似た、ひとはげの光が横切り、角度に  
よってちらちらと動く。

こっちを見つめて、す早くウインクで  
もしたかのように。

西洋の言い伝えでは、外面的な美しさ  
と力を与えてくれる石。起伏の激しい人  
生をひきよせると言われた。また、東洋で  
は、怠惰な人が身につけると、いっそう怠  
惰になるといしましめられた。

そんなキャッツ・アイが登場する映画  
が1962年に日本で封切られた『瘋癲老人  
日記』なのである。

谷崎潤一郎の原作を、当時、質の高い娯  
楽映画の第一人者だった監督、木村恵吾  
が作品化したものだ。

病気の老人が主役の映画といたら、  
地味な社会派のストーリーかと思いがち  
だが、谷崎潤一郎の世界はちがう。幾重に  
も屈折した究極のエロティシズムが描か  
れている。

主人公は7歳の老人・卯木督助。看護婦  
づきの老人だが、社会的には成功しており、  
美食や観劇など、世の楽しみを味わいつ  
くしている。

著作権の都合により写真は非掲載

写真提供 大映「瘋癲老人日記」1962年

今、体の自由のきかなくなった督助の  
関心は、息子の嫁、若くて美しい颯子に集  
中しているのだ。

もと踊り子だった颯子は、今は洗練さ  
れた品のよい奥さまぶりだ。夫は浮気を  
しているらしいけれど、ある程度、贅沢も  
できる暮らしを、それなりに満喫している。

彼女は、養父が自分に執着しているの  
を知っている。その関心をうまく利用して、  
車だのハンドバックだの買わせたりして  
いる。

颯子のそんな、ちょっとした悪女ぶりを、  
今まで遊びつくしてきた老人、督助は喜

んでいる。まるで自分の病気を利用する  
ようにまでして、督助は颯子に甘え、近づ  
こうとする。

颯子はあからさまに邪けんにするのだ  
けど、その冷たささえ、この何もかも手に  
入れた老人には、新鮮で心地よい。二人の  
いじめいじめられ関係は、屈折した心理  
ゲームの要素を帯びてくる。

そのクライマックスに、極上のキャッツ・  
アイが登場するのである。

実は、督助老人、金持ちでありながら、  
お金にはシビアなのである。実の娘が、家

が抵当に入りそうなので、少  
し援助してほしいと頼みこむ  
のでさえ、渋い顔をしてうん  
と言わないほどだ。

その督助に、颯子が「キャツ  
ツアイを買って」とねだった  
のである。督助は、颯子がかわ  
いいにはちがいないが、その  
キャッツアイは、300万円もす  
るといふのだ(この物語は  
1961- 2年に書かれている)。

ここで颯子のねだったのが、  
ダイヤモンドでなくキャツ  
ツアイだということが、いか  
にも宝石を知りつくしている  
贅沢好きの女の雰囲気です。  
とてもよい。ダイヤモンドでは  
普通すぎる。猫目石がほしい  
ということが、彼女自身の  
洗練された趣味をもほうふつ

とさせるのだ。

しかし、督助はそれを拒否する。

いくら嫁の色香に迷ってはいても、  
それは高すぎる、と正気に返ったのだ。

ここから、颯子の腕の見せどころで  
ある。

彼女の色っぽさは、これまでも増して、  
とろりと甘い。

督助は、その魅力に敗北し、颯子の指に  
は、指の幅からはみ出るほど大きい、15カ  
ラットのキャッツアイが光ることとなっ  
たのだ。

彼女はその石をはめて、恋人とボクシング観戦に出かけるのである。

野球でも相撲でも、もちろん時代的にいってサッカーでもなく、ボクシング観戦というところが、谷崎のうまいところだ。

キャッツアイには、少年たちも夢中になるような、さわやかなスポーツは似あわない。

ひとつ間違ったら死にもつながる、血の匂いのするスポーツ、ボクシングだからこそ、キャッツアイの、とろりとした大人の味わい、野性的な輝きに負けないのである。

ボクシングと、猫目石はよく似あう。

この督助を演じたのは、品のいい老紳士役の多い俳優、山村聡だった。

颯子役は、若尾文子である。当時 28歳、匂いたつような美しさの絶頂にあった。

今、知らない人も多いのだろうが、若尾文子は、すごい女優なのである。マニアックな映画好きは、ミニシアターの若尾文子特集に、飛びつくようにして集まる。私自身、傘もさせないような大嵐と落雷の中、彼女の主演作を見るために渋谷まで出かけたことがあった。

1960年代は、邦画が全盛期の最後の輝きを放っていた頃だった。当時の邦画の質の高さは、今、見ても衝撃を隠せない。

若尾文子は、その当時の大スターだった。

可愛くて、罪深い、大人の女が演じられる数少ない日本の女優のひとりである。フランスでいえば、ジャンヌ・モローの成熟とブリジット・バルドオの可愛らしさをかねそなえている。日本よりイタリアやフランスで人気が高いというもうなずける。

谷崎潤一郎の濃密な世界を表現できるほんのひとにぎりの女優のひとり。彼女は、この作品の他、「卍」刺青」といった谷崎の中でもひとときわくせのある名作にも主演し、すばらしい演技を見せている。

さて、「瘋癲老人日記」に戻るが、本で読んだときには、私はこの嫁にあまり好感が持てなかった。私の読みが浅いためだが、物欲が強い、外見だけの女に思えたのだ。

しかし映像で、あでやかな若尾文子を目にしたとき、印象はちがった。もし督助に出会わなかったら、ただの少し計算高い、かわいい女ですんだのかもしれない。

それが老練な督助の手練にやられ、次第に悪女ぶりを助長されていったのではないか。

遊びつくした贅沢な老人の美しい生きた人形にされたとしたら、15カラットのキャッツアイくらい、もらわなくてはひきあわないのではないのではないのだろうか。

ボクシング観戦の折り、若尾文子の白い小さな手にはめられたキャッツアイは、あまりに大きくて、か細い指が折れそうだった。

それはまるで、老人の過剰な愛にあえていっている女の不安定な心境をそのまま現しているようだった。

そんな人間どもの人生模様などこふく風、猫目石は、今日もあでやかにまたたいている。

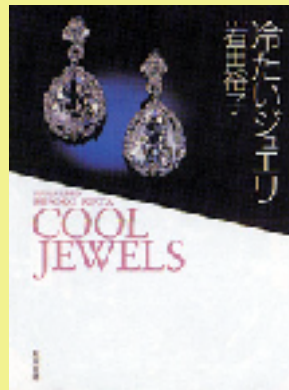


岩田 裕子(いわたひろこ)  
東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学文学部卒業(西洋史専攻)編集者を経て、少女雑誌、ファッション誌などに記事を執筆。現在は、宝石・妖精のエッセイストとして活躍している。

岩田裕子 著

## 「冷たいジュエリ」

本物は口にあてると冷たい、  
だから「冷たいジュエリ」



双葉文庫 本体価格 514円

木の葉の色も艶めく秋、宝石の本をじっくり読んでみるのもいいかもしれません。

というわけで、パラパラめくっていただけると、うれしいのが「冷たいジュエリ」。

宝石のもつ毒の部分、人間をとりこにしてやまない<sup>こわく</sup>曇惑に、焦点をあてて書いた本です。それぞれの宝石の性格を意識しながら書いていたら、人間にとってもよく似ているので驚いた記憶があります。

私自身の秋は、入院、手術といった大イベントで過ごします。全身麻酔から目がさめたそのとき、私の新しい物語がはじまる……。